

岡山大学創立 60 周年記念式典学長式辞

本日ここに、ご来賓ならびに多くの関係者各位のご臨席のもと、岡山大学創立 60 周年記念式典を挙げていくことは、喜びも格別であります。

本学は、昭和 24 年に旧制の岡山医科大学、第六高等学校、岡山師範学校、岡山青年師範学校、岡山農業専門学校を母体として、「医学部」「法文学部」「理学部」「農学部」「教育学部」の 5 学部で構成する新制大学としてスタートいたしました。

昭和 30 年代の高度成長期に、岡山県でも水島臨海工業地帯が形成され、産業教育の期待が大学に寄せられるようになり、「工学部」を創設したのを皮切りに、「薬学部」「歯学部」を次々と開設し、さらには、法文学部を「文学部」「法学部」「経済学部」の 3 学部に分離・改組、さらに平成の時代に入り、世界的に環境問題が重要で緊急の課題となった社会情勢を背景に、国公立大学初の環境系学部として「環境理工学部」を創設、現在の 11 学部体制となりました。

大学院につきましても、創造性豊かな研究者及び高度な専門技術者の育成に対する社会的要請に応えるため、従来の学部を基盤とした積み上げ式の研究科から、異分野融合、学際化を目指し「自然科学研究科」「社会文化科学研究科」「医歯薬学総合研究科」を中心とし、法曹・教職の専門職大学院も加えた 7 研究科の総合大学院体制を構築いたしました。

少し本学の歩みを紹介させていただきましたが、ご列席の皆様、本日、本学においていただき、幾年かぶりに津島キャンパスに足を踏み入れられて、どう感じられましたでしょうか？ずいぶん樹木たちが太く大きくなったなと思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。新しい研究棟などを建てるにも自然を大切に「環境第一」としてまいりました、本学も樹木たちと一緒に 60 年成長してきた証しでございます。そして建物もずいぶん増えました、平成 16 年の法人化の時に約 22 万㎡あった耐震性の劣る施設及び機能の改善が必要な施設など殆ど古い建物は改修が終わり、あと残りは文法経の建物のみとなっております。また、地域医療の中核拠点としての病棟約 1 万 7 千㎡などの整備、学生支援の充実など魅力あるキャンパス環境の整備など、他の大学がうらやむほどの施設整備予算を獲得し、他に例を見ないスピードでキャンパス整備を押し進めてまいりました。現在、津島地区 63 万 8 千㎡、鹿田地区 13 万 5 千㎡をはじめ、207 万㎡という全国屈指のキャンパス面積をほこりますが、皆様、なぜかキャンパスが狭く感じられませんでしたでしょうか？この広大な土地、樹木たちをも凌駕する建物・施設の配置状況も本学の成長の証しでございます。

さて、近年でいちばん大きな変革と申しますと、なんと言っても平成16年の国立大学の法人化でございます。国立大学を国から、各大学が法人となって設置させ「中期目標・計画を建て、教育・研究・社会貢献をしっかりとやり民間的経営手法を取り入れるなど管理運営も自助努力して成果をだしなさい。だけでも国として文部科学省は目を光らせ、色々口も出しますよ。」という何とも言い難い政策でありました。しかし、本学はこれを契機にして、第一中期目標期間では「人類社会の持続的進化のための新たなパラダイムの構築」を掲げ、さまざまな大学改革をいち早く開始し、ステップアップといたしました。

まず、全国の国公私立大学から「評価の岡山大学」と称されるほど、自己評価や教員活動評価や職員勤務評価の個人評価に取り組み、給与へも反映させております。そういう積極的な取り組みが評価され、外部評価では業務運営の改善及び効率化に関する目標達成で「非常に優れている」と高い評価を受けました。また、民間の格付け投資情報センターには、「信用性は極めて高く、優れた要素があり、安定的である」と「AA+」の高い評価を得ました。加えて、平成21年4月発表のトムソン・ロイターによる日本の研究機関ランキングの日本順位17位、世界順位335位に位置付けられ、その上昇が目立つ大学として慶応大学とともに特記されました。現在、運営交付金197億、授業料78億、病院収入227億、科研費、共同研究、寄付金等で60億など、総額で約600億円の年間予算でございます。旧帝大学の予算規模には到底及びませんが、旧帝大と同じランクの土俵の上で勝負させていただいておりますので、今後とも、ご支援の程よろしくお願いいたします。

本来ならば、教育や研究など各方面の変革、成果等を一つ一つご報告すべきですが、時間の関係もあり、ここでの詳細な紹介は割愛させていただくと思いますが、

教育面においては、特に、授業改善等に学生が主体的に関わる「学生参画」による教育改善の取り組みを全国に先駆けて実施、また、岡山をテーマとした授業「This is Okayama」といった学生考案授業の開設などさまざまな成果を生んでおり、この活動は社会から注目を集めております。週刊朝日の2008年度版による「全国の国公私立大学学長による教育分野におけるランキング」で全国8位の評価でありました。

研究面では、本学で生みだされた優れた研究成果を社会に還元する仕組みとして、「研究推進産学官連携機構」を設置、平成19年度「大学発ベンチャー設立数」で全国1位、平成20年度「大学・研究機関の特許資産の規模」において全国4位にランキングされるなど大きな成果をあげております。

国際交流の面では、現在、海外の大学・研究所など約170余りの協定を持ち共同研究をはじめとする交流を行っております。特に、近年では、ベトナムにおける環境保全分野などの研究者や企業人養成のため、岡山の企業に留学生の里親となっただき「フ

工大学院特別コース」を設置、また、中国東北部の優れた人材の積極的集積を行う「中国東北部大学院留学生交流プログラム」(通称 0-NECUS) も実施しております。さらに、平成 20 年にはパラオ共和国政府、平成 21 年にはグアム大学とも協定を締結し、ユネスコチャアの事業である廃棄物管理についての教育研究活動を行うなど、当国の抱える環境問題解決のため連携協力を行っております。

こうして本学は、海外からの留学生620名を含む1万4千名を超える学生が在籍する日本有数の総合大学として発展してまいりました。一方、60年間に本学から社会に送り出した卒業生及び修了生は、10万8千名にも達し、中国・四国地域の産業、医療、法曹、行政など各界各層はもとより、全国において、さらには国際社会の様々な分野において、中心的、指導的な立場で活躍しておられます。

こうした成果を基盤に、次期中期目標期間では、国際的に上位な研究機関となることを指向すると共に、個別専門領域の深化だけではなく異分野にまたがる学際性やその融合での研究成果を基礎として、社会の多様な領域において主体的に活躍できる有為な人材を育成することを基本とするとともに、新たな目標、「学都・岡山大学」の創成に挑戦したいと思っております。学都の「都」には、「集まる」や「統べる」といった意味があり、「学都・岡山大学」は、まさに本学が大規模総合大学としての特性を活かし、中国・四国地域の中核的な学術センターとして機能することを意味します。また、環境、エネルギー、食料、経済、保健、安全、教育等々の困難な諸課題に対し、既存の知的体系を発展させた新たな発想の展開により問題解決に当たることを目指してまいります。

最後になりましたが、ご来賓ならびに関係者各位におかれましては、今後とも、岡山大学を愛し続けていただくとともに、なお一層のご指導、ご支援のほどお願い申し上げます。本日は、誠にありがとうございます。

平成21年10月22日

国立大学法人岡山大学長 千葉 喬 三